

B29 墜落炎上セリ

昭和20年3月 B29植木墜落の記録

十時三十分 警戒 警戒
十二時十分 空襲 解除
三十分 時 警戒 解除
三十分 時 警戒 解除
B29 墜落 炎上 セリ

植木竹造の日記

B29の植木墜落を伝える会

2013

植木町に墜落したB 29と捕虜搭乗員

牛嶋英俊

■プロローグ

太平洋戦争の末期、昭和二十年三月二十七日は満月にちかい月夜だった。直方市の食糧営団事務所にいた牛嶋満(明治四十五年生)は、騒ぎ立てる人声で戸外に出た。人々が指さす方向を見上げると、巨大な飛行機がこれまで見たこともない低空飛行をしていた。四つの発動機をもつ機体は、まぎれもなく米軍の大型爆撃機 B 29であった。

機体は煙と炎に包まれており、追いつがる日本機から曳光弾が発射されると、炎は一段と激しく吹き出した。B 29は市街地上空を南から北に通過し、やがて町並みのむこうに「百万燭光もあるような」巨大な火柱があがった。

「映画館のむこうに落ちた」と人々は北に走ったが、実際は3kmも先、隣町の鞍手郡植木町に墜落していた。「夜の火事は近くに見えるというのと同じだった」と牛嶋は回顧している。

牛嶋満は筆者の父であり、B 29の墜落談は幼少のころからくりかえし聞かされてきた物語でもあった。

戦時中、直方市に空襲はなかったが、福岡市と北九州工業地帯をむすぶ爆撃機の通路となっていた。

「多い時は東の福智山から西の六ヶ岳上空まで、B 29の切れ目がないほどだった」と牛嶋は回想する。同月、直方市は空襲に備えて、第一次の家屋疎開を始めていた。

B 29が墜落した事件は一定年齢の市民にはひろ



てに州九北、B 29のの前寸墜撃・捉捕に網火が我

く記憶されているが、戦後に刊行された市史のにも記述がなく、正確な事実関係は知られていなかった。筆者はこれまでに体験者からの聞取りや資料の発掘を試みてきたが、そのなかで「POW(戦時捕虜)研究会」の福林徹氏から植木墜落にかんする米軍側の記録を教示頂き、日米双方の記録をつき合わせる事ができた。これらの作業を通じて、事件の復元を試みる。

■北部九州に相次ぐ空襲

この年の三月、戦況はおおきく動いていた。米軍の猛攻をうけていた硫黄島の守備隊は「十七日夜半を期して全員総攻撃」を打電して通信が絶え、二十一日、大本営は硫黄島玉砕を発表した。硫黄島の奪取により日本本土間の障害をなくした米軍は、マリアナ基地から大挙して本土空襲をはじめた。二十七日は午前十時から二時間間にわたりB29一六一機が来襲、長崎県大村、大分および福岡県の大刀洗飛行場を爆撃した。同日夜にも一〇二機が来襲、機雷投下と爆撃をおこなった。

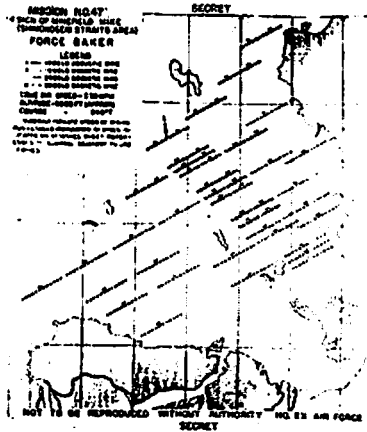
これに対し、日本側は対空砲火と戦闘機で迎撃し、撃墜十機以上の成果をあげたとされる。当日の空戦の様子は、戦闘機のパイロット樫出勇の『B29撃墜記』(光人社にくわしい)。

この作戦に参加した爆撃機の一機が植木町に墜落することとなる。

時刻はすこしさかのぼる。十二時四十分、足摺岬の電波警戒機は、サイパンを発進する米軍

の大型梯団をとらえた。本土到着は二十二時ころと予測され、日本側はただちに山口県小月基地の夜間戦闘機を待機させるなど、迎撃態勢を整えた。

来襲したのは、アメリカ第二十一爆撃兵団・第三一三航空団の第五〇四爆撃群であった。第三一三航空団は機雷敷設の専任部隊として訓練を重ねており、この夜はレーダー照準による低高度投下を実施しようとしていた。



機雷敷設計画(米国立公文書館)

マリアナのテナン島北飛行場を発進した一〇二機のB29は豊後水道を通過、二十三時半ころ数機編隊の単縦陣で北九州地区に侵入した。高度は二千から三千メートルの中高度、その任務は都市の爆撃と関門海峡への機雷投下にあった。米軍はすでに沖繩本島への上陸を視野にいられており、海峡への機雷敷設は作戦支援の一環であった。

このころ、B29の侵入コースは足摺岬から豊後水道を北上し、国東半島・行橋市をへて北九州工業地帯に至り、その後福岡市から佐賀・長崎上空を大きくまわって海上に脱出、サイパンに帰還するものであった。

この爆撃隊のなかに航空機関士フィスケ・ハインレイ少尉(一九二〇年生)が搭乗する4224864号機があった。機長のジョン・ブラウン中尉をはじめ、操縦士・航法士・爆撃手・無線士・射撃手あわせて十名のクルーが乗り組んでいた。クルー名"ストーク(コウノトリ)クラブ・ポイズ"は、ニューヨークのナイトクラブの名前だった。

出撃前の説明では、目標地には対空射撃も敵戦闘機もなく、「問題のない、楽なミッション」のはずだった。そこで指揮官は、燃料節約のためB29の尾部機関砲の射手と弾丸を降ろすことを命じた。

B29が基地を発進するとき、「楽なミッション」から外された射手ディック・ホールは不機嫌な敬礼で仲間を見送った。実は彼が一番幸運なくじを引き当てていたのだが。

航空機関士席は防弾板をはさんで操縦士と背中合わせにあり、正面パネルに三十あまりの計器類、手前にはスロットルレバーがならぶ。左側の小窓の数フィート先では、二千二百馬力のサイクロンエンジン二基が直径五メートルの四翅プロペラを肅々と回転させていた。

海峡に近づくと、クルーは仰天した。前方に対空砲火が炸裂し、無数の探照灯が空を照射していたのだ。前方のB29が探照灯に捉えられるとたちまち砲火が集中し、爆発を起こして墜落していった。これは「楽なミッション」などではなかったのだ。

機雷投下地点に近づくと、これまで上空を照

していた探照灯が一斉に消えた。対空砲火もやみ、眼下の海峡は束の間平和な海に見えた。機体下部の爆弾庫扉がひらくと、航法士ハーラン・フィンテル少尉は落着いた声で

「十カウントダウンで投下」

と爆撃手バクスター・ラブ少尉に伝えた。合図にあわせてゆつくりと十を数える間、合計千ポンド(約四・五トン)の機雷はつきつきに海面へパラシュート投下された。

投下を終えた編隊は、西へ進んで北九州工業地帯にさしかかった。八幡市上空を通過するとき、青色の探照灯がハンレイ少尉機をとらえた。たちまち無数の光芒が集中し、対空砲火が盛大に打上げてきた。機長のブラウンはスロットル全開で上昇して上空の雲に逃げ込もうとしたが、周囲には無数の砲弾が炸裂し、たてつづけに数発の直撃弾を受けた。

当時北部九州地区には、北九州高射砲隊に属する四十六の高射砲中隊が配備され、約二七〇門を有していた。一部は直方市の機関庫や遠賀川の間鉄橋の防衛にあたったが、大半は八幡製鉄所付近に配備されていた。

満を持して連射

火を吐きのたうつ機雷

夜間でも得意の猛撃

新聞はこの時の様子を「^{おぼろ}朧月夜の北九州に砕く B29」の見出しで

「第六番目の一機は北西方から某陣地の上空に近づいてきた。高度一千四百、はやる射手を抑へて隊長はまだ、まだ、とぐつと手許に引きつけた。そして精一杯引きよせて浴せた一連射はみごと胴体と右の内側発動機に二発命中だ。バツと火を噴くのが対空双眼鏡一杯に映る。さらにまた第二連射、こんどは一発また右の内側に命中、よろめくやうに高度を落して巨体は墜ちて行った」

と報じている。(朝日新聞三月二十九日)

実はその夜は冴えわたる月夜だった。黒崎神原町(八幡西区)の梶原茂樹(昭和七年生)の自宅付近では、電波妨害の錫箔が大量に降るなかに高射砲の砲撃音がとどろき、炸裂した砲弾の破片が音をたてて降り注いだ。このとき梶原は、猛烈な砲撃の硝煙で夜空が朧月夜のようになったのを覚えている。

■被弾・墜落と二人の脱出

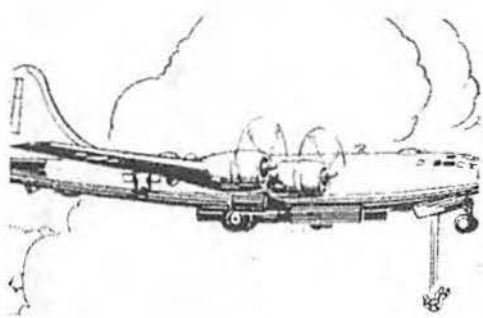
「超・空の要塞」の異名をもつ B29 は記事のように簡単には墜落しなかったが、機内は修羅場だった。対空砲火をうけて機首の爆撃手ラブ少尉は即死、機長のブラウン中尉は瀕死の重傷、操縦士のアルベルト・アンドリュウ少尉は意識不明だった。後方座席では、無線士ローズ軍曹と航法士フィンテル少尉が爆弾庫からの熱風と炎で焼死していた。

機体後部からも火災発生の連絡があり、ハンレイ少尉は状況把握しようとしたが、計器の針は「大当たりしたラスベガスのスロットマシンのように」回りつづけていた。

小窓の外ではエンジンと翼が火を噴いていた。左翼にも引火したとの連絡が入り、この機全体が燃えているのがわかった。消化装置を起動したが効果はなく、砲弾がたてつづけに彼の座席の下でも炸裂した。

テニアン基地にもどれないのは明らかだったが、B29 はひたすら海上への脱出を試みていた。海に不時着すれば、潜水艦による救助が期待できたからだ。しかし通信装置が停止して、機的位置も状況も不明だった。

気がつくとも探照灯の照射圏からはずれ、砲撃も止まっていた。しかし後部から火災の熱風が押し寄せ、操縦室は危機的な状態だった。脱出口は前部爆弾庫と前輪格納区の二カ所だったが、爆弾庫は炎上中であり、選択肢はひとつしかなかった。



機首からの緊急脱出法
(「B29操縦マニュアル」より)

当日の空襲を報じる新聞記事



墜落現場を北から見る ×が墜落地点(国土交通省遠賀川事務所提供)

ハンレイ少尉は脱出口に通じる床のハッチを引き上げたが、そこは前輪が格納状態で通過は不可能と思われた。しかしこの動作で大量の冷気が操縦室に吸い込まれ、一瞬、煙と炎がおさまった。

幸運にも、この冷気でアンドリユー少尉の意識がもどった。彼が反射的に着陸装置を起動すると、前脚が降りはじめ、脱出口が開いた。すかさずアンドリユー少尉が飛び降り、ハンレイ少尉もこれに続いた。はずみでヘルメットが吹き飛び、機体の炎を通過するとき小さなやけどを負ったが、パラシュートは無事に開いた。降下するハンレイ少尉の視界には、愛機が燃えながら弧を描いて落ちてゆき、やがて地上で爆発するのが見えた。

墜落するB29は、多くの人に目撃された。直方市神正町の香月良則(昭和八年生)は、消防団員が自宅となりの火の見やぐらで「飛行機が落ちる」と叫ぶのを聞いた。見上げると、巨大な飛行機が火を噴きつつ頭上を通過していった。

植木の南方六・五kmの直方市上境では、占部雅生(昭和八年生)が防空壕の外をうかがっている。火だるまの飛行機が落ちてゆくのが見えた。大きな墜落音に壕内の家族は頭をかかえて突っ伏したが、外では雅生が「アメリカの飛行機が落ちた、バンザイ」と叫んでいた。

上境の北に隣接する永満寺(えいまんじ)では、篠原義一(昭和十年生)が「飛行機が燃えている」との声で戸外に出ると、北の空に三条の探照灯に捉えられたB29が見えた。墜落までの十五分ほどの間、何度も旋回しながらゆっくりと高度を下げていったという。

地元の植木町では、隣組の二十人ほどが川船に乗って山田川用水路の暗渠に避難していた。本田六子(大正十二年生)は、大きな落下音とともに

に、暗渠の外が昼間のように明るくなったのを見た。野口セツ子(大正十三年生)は、防空壕に入らず辻の自宅にいたが、大きな衝撃音とともに東の方が明るくなり、その明かりで中島橋が見えた。また、対岸の木屋瀬(八幡西区)の福田材木店付近では、墜落機が巻き上げた大量の土砂が夕立のような音をたてて降った。

植木の北西八kmの遠賀町木守では、渡辺大(昭和八年生)が庭先で遠い花火のような八幡空襲の砲火をながめていた。このとき、はるか南方に墜落する飛行機の火柱が見えた。

■落下した搭乗員の逮捕

月明かりの中を降下するパラシュートは、地上からもよく見えた。降下地点は直方市感田室木の田んぼと、おなじく知古の国鉄自動車区北側付近の二カ所だった。ハンレイ少尉が降下したのは後者と考えられる。(戦後の米軍による調査報告では感田小学校付近と日満学校付近となっているが、これは落下地点付近の目印となる公共施設を示したものと思われる)

そこには四、五十人の群衆が輪になって降下して来る「鬼畜米兵」を待ちかまえていた。興奮して上空を指さす姿は、ハンレイ少尉にとつて少なくとも「友好的な歓迎団」とは思えなかった。

このとき、彼は降伏の方法を教わってなかったことに気づいた。たしかにテニアン基地では、今や戦争の主導権はわが方にあるので、敵の捕虜になったら尋問には進んで答え、無用な虐待

を避けるようにと教えられていた。しかし、それは「捕虜になったあと」の心得であり、「捕虜になるとき」の方法ではなかったのだ。日本語で「降伏する」は何と云うのだろうか。

パラシュートがやわらかい稲田に着地すると、周囲は竹槍や農具を手にし、敵意に満ちた群衆に囲まれていた。ハンレイ少尉はピストルを持っていたが、発射すれば確実に自分が殺害されると思い、両手をあげて「surrender」（降伏する）とくりかえし叫んだ。しかし彼の言葉を理解する者はいなかった。

群衆は一斉に襲いかかり、四方から棒や拳で殴りかかってきた。幸いだったのは、誰も刃物を持っていなかったのと、身につけていた防弾チョッキやライフベストが彼を守ったことだった。ハンレイ少尉は「surrender」と叫び続けたが、暴行は続いた。このまま死ぬのかと思ったとき、長身で体格のよい制服警官が駆けつけ、群衆を制止しようとした。激昂した彼らは警官にも襲いかかり、警官はハンレイ少尉をかばって何度も殴られた。

やつこのことでハンレイ少尉を群衆から引き離した警官は、彼に手錠をかけた。警官は顔から血を流していたが、後年ハンレイ少尉は、そのふるまいは職務を淡々と遂行する敵意のないもので、彼に深く感謝したと回想している。

結果的に、警官の行動は地元住民にとっても幸いだった。なぜなら、当時米軍パイロットの墜落は全国的に多発しており、しばしば住民による彼らへの虐待や殺害事件が起きていた。軍もB29の搭乗員は非戦闘員を無差別に殺傷する

戦争犯罪人とみなし、とくに過酷に扱った。そこには無差別爆撃に対する報復感情があったことは否定できないが、戦後、連合軍はこれらを徹底的に調査し、当事者を戦犯として逮捕・処罰している。

やがて憲兵と警察官、それに市役所の職員高島次夫らが乗ったトラックが到着し、高島は他の職員と協力して腰から血を流して地面に横たわっているハンレイ少尉を荷台に抱え上げた。一説には消防団員の田中文七が協力したともいう。

二人を乗せたトラックは、群衆の喚声と怒声に送られて今きた道をUターンした。周囲は灯火管制で真つ暗だったが、上空には帰路につくB29の爆音が轟いていた。ハンレイ少尉は、今の自分と彼らとの距離がはてしなく遠いことを感じていた。

一方、感田室木の田圃に降下したアンドリュース少尉は警防団に逮捕された。逮捕時の状況はよく分からない。須藤賢一（昭和八年生）は、降下地点近くの安高神社横にあった十一分団消防小屋前に警防団員と後ろ手に縛られたアメリカ兵がいたのをおぼえている。米兵は大男で、とくに出血もなく、怪我はないように見え、眠いのか時々あくびをしていた。地元の人が顔を叩こうとしたが、相手があまりに大きいので、飛び上がってビンタをしていたのがおかしかったという。

近くに駐在所があったが、車もないので、米兵は歩いて町の方へ連行され、このときパラシュートも丸めて一緒に持って行ったという。

■直方警察署から飯塚憲兵隊へ

ハンレイ少尉が乗せられた車は、舗装のない道をしばらく走り、直方市の警察署に着いた。薄暗い照明の署内で、ピロード張りのソファに座らされていくつかの尋問をうけた。そのあとで、通訳は自分も群衆の暴行を見ていたといい、これをわびた。大柄の警官は、傍らで好意的な態度で控えていた。群衆の手荒い歓迎とはことなり、警察の扱いは寛大だったようだ。

ついで、医師と看護婦たちが来て、二度にわたり傷の手当てをした。医師の大森守と岸本道夫は当時の直方医師会会長と副会長であり、大森は県医師会直方支部勤労報団の隊長も務めていた。



大森守医師(上)と岸本道夫医師

傷は頭と背中、および臀部だったが、医師たちは彼に何やら思いやりのある言葉をかけながら全身を消毒し、薬を塗って包帯を巻いた。ハンレイ少尉は「惜しげもなくシルクの包帯を巻いてくれた」と回想している。包帯は絹ではなかったろうが、患者の取扱いは懇切だったようだ。注射をすませた医師たちは一礼して退出し、

ハンレイ少尉は身振りで最大限の感謝を表した。医師たちが退出すると、ハンレイ少尉は手錠のまま畳の小部屋に移され、看守から横になるようにうながされた。傷の傷みで眠れないでいると、突然数名の兵士が荒々しく踏み込み、無抵抗のハンレイ少尉を銃の台尻で何度も殴りつけた。左腕に特殊な腕章をつけており、彼らが「憲兵」という軍事警察であることをハンレイ少尉は知ることになる。

警察とは違い、憲兵は手荒かった。ハンレイ少尉を後ろ手に手錠をかけ直し、目隠しをして押し倒し、そのまま警察の玄関まで引きずり出した。これが人々へのみせしめであるのは明らかだった。ゆるんだ目隠しの下から見ると、玄関前にはトラックが止まっており、意外なことに荷台には目隠しをされた米軍兵士が数名の日本兵に囲まれて座っていた。ハンレイ少尉もおなじ荷台に投げ込まれ、また何度も銃床で殴りつけられた。

捕虜同士の会話は許されなかったが、日本兵と会話する声で彼がアンドリユー少尉であることがわかった。彼は負傷もなく元気だった。

二人の捕虜を乗せたトラックは、途中何度もエンストしながら一晩中走り、明け方に直方市から十三キロの南、飯塚市警察署に駐屯する福岡憲兵隊飯塚分遣隊に到着した。

■墜落現場とその後

B 29が墜落したのは、植木と木屋瀬をむすぶ旧中島橋(全長四一〇メートル)下流の河川敷であつ

た。ここは遠賀川と犬鳴川の合流点にあたり、橋の上流側には海軍特攻機の滑走路が急造されたほど開けた地形である。「橋の欄干をかすめるように墜落した」との証言とあわせて、B 29はここに不時着を試みた可能性もある。

墜落時の様子は、連合軍による戦後の調査報告に

「小倉から直方方面に向かつて、火を吹きつつ低空飛行するB 29に、二、三機の戦闘機が攻撃を加えていた。B 29はこれを振り切ろうとするかのように西に向きを変え、つぎに北に向きを変えた。そのとき、突然機首を下げて墜落した。機体は爆発し、破片は半径四百メートルに飛び散った」とある。(GHQ資料・国立国会図書館蔵)



遠賀川が三途の川

墜落を報じる新聞記事(朝日新聞三月二十九日)

当時の新聞には「遠賀川が三途の川」の見出しで

「敵機は右旋回したかと思ふ間もなく再び反転、遠賀川の砂原、轟然と真逆様に機首を突込んだ。深さ三メートル直径五メートルばかりの穴が四個砂原に並んでいる。その穴の内がまだぶすぶすとくすぶっていた。

機体は木つ端微塵に砕け散っているだけだ。二千数百万円を食ふB 29の巨体はどこを捜してもない。あまりにも哀れなB 29の最期だ。穴のすぐ傍に一名、それからすこし上流にも一名、乗員の死体が真黒に焦げて河原の砂に横たはっていた」

と敵愾心むき出しの記事と「北九州で対空砲火で撃墜されたB 29の残骸」の写真がある一夜明けた中島橋周辺は、墜落機を見ようと押しよせる人で大混雑した。

原サツ子は中島橋の上から見たが、河川敷が道を作ったように削られていて、その先の飛行機の残骸は西向きのように見えた。野口セツ子も現場に行ったが、人ばかりで橋は通れず、立ち入り禁止の綱が張ってある堤防の上から飛行機の残骸を見た。

柴田喜樹(昭和十年生)は、宮田町(宮若市)大隈から父につれられ八キロの道を歩いて見に行つた。橋の上が大混雑だったことだけが記憶にあるという。

墜落現場の処理は植木の警防団がおこなった。阿部基吉(明治二十一年生)は、団員を指揮して四散する六人分と思われる遺体を回収した。このとき団員のなかには「憎い敵兵だ」と遺体を

傷つけようとする者もいたが、阿部は「死んだ者に敵味方はない。馬鹿なことをするな」と一喝、翌日丁重に火葬した。

遺骨は箱に収められ、鞍手郡宮田町(宮若市)の福岡俘虜収容所第二十分所に送られた。当時ここには欧米豪の捕虜七九二人がいて、貝島大之浦炭鉱第二坑で使役されていた。

後日談となるが、終戦後の昭和二十年八月三十日、この収容所に救援物資を投下する目的でテニアン飛行場を発ったB 29は、悪天候のため宮崎県高千穂町に墜落している。

阿部基吉は、王樹の号で知られた俳人である。戦後の連合軍の調査に対し、遺体のうち一体は女性だったと証言している。

植木の墜落機に女性が搭乗していたことはひろく信じられている。墜落地点にハイヒールやハンドバック、女性の体の一部があつたなどと語る人は多し、多くは伝聞で、信憑性には疑問がある。ここでは同様の話は各地の墜落現場で語られている一種の都市伝説であることをあげて、否定的見解を示しておこう。

もつとも、昭和十九年八月二〇日の永犬丸えいのまる(八幡西区)のB 29墜落現場では女性の靴を見たとの複数の確かな目撃証言があり、ある種のお守りかマスコットとして靴だけが乗っていた可能性は考えてよいだろう。

その後、墜落機の残骸は終戦まで現場に放置されたが、一部は中島橋西詰の植木小学校の校庭隅に集積されていた。はじめは周囲を縄で囲

っていたが、その後は部品などを持ち帰り、生活用品に転用したとの話もある。香月良則は友人から墜落機の防風ガラスをもらい、「匂いガラス」として遊んだという。

戦後、八幡市の別のB 29墜落現場を訪れた写真家のジョー・オダネルは、付近の農家で飛行機の部材と思われる金属盆で茶菓子を接待され、複雑な思いを抱いている。(「トランクの中の日本」)物資不足の当時、高品質な金属製品などは思わぬ「恩恵」であつたのかも知れない。

最終的には、戦後米軍の調査団が現場からエンジンやプロペラなどを掘り出して回収した。大之浦炭鉱にあつた遺骨は、佐世保からきた米軍将校が持ち帰った。

また木嶋肇(大正十五年生)は、墜落当日に現場で拾った墜落機のエンジンバルブを今も写経の文鎮に使っており、「空襲で亡くなった人々の、いくらでも供養になれば」と語っている。

このあと、二人の捕虜は福岡市の西部軍司令部経由で東京の大森捕虜収容所に送られ、ここで終戦を迎えた。

その後平成七年、ハンレイ少尉は姫路空襲に参加した元B 29搭乗員らと姫路市を訪れ、その二年後、捕虜体験を回顧録「戦争犯罪人とされたアメリカ人」に書いている。(文中敬称略)



このレポートの執筆にあたり、多くのご教示を頂いたPOW研究会の福林徹氏に深く感謝申し上げます。英文訳出にあたっては、南正紀氏によるところが大きい。また本文中にあげ得なかつた多数の方々からも貴重なお話を伺った。あわせてお礼申しあげます。

この冊子は、『西日本文化』二〇一一年八月号に掲載した「墜落B 29と捕虜搭乗員」に、その後の知見を加えて加筆修正したものである。

二〇一三年一月

ハンレイ少尉の回顧録

木屋瀬からみたB29の墜落

数住 守一

昭和二〇年三月二十七日は「小倉大空襲」のあった日である。

私は、丁度大学の春休みになったばかりであったが、自宅に早く帰りがたがる一人の後輩を無理に我が家に誘つての帰省であった。夕食も入浴も済み、寝床に就いたばかりの時、空襲警報が鳴り響いた。

すぐに庭に飛び降りて防空壕の入り口に行んで空を見上げた。(この防空壕は庭の片すみを深く掘り下げた穴の中に、岩尾酒造からゆずられた五尺の桶という醸造用の酒樽を横に倒して、床になる所に板を張り、電線と電燈を用意し、上に厚く土を盛り上げた物で、中に入ると酒の香りが深い心地の良い壕であった。)

「敵機編隊は、豊後水道を北上中」というラジオ放送の後に、北九州の大空襲があるというのがその後の決まり事みたいになつたが、この夜はその皮切りであつたらしい。

福地連山の向こう側で大空襲が始まっていた。アメリカ空軍の最新鋭重爆撃機ボーイングB29という四発の大型機が、整然と三機ずつ編隊を組み、亜成層圏といわれる高度凡そ一万メートルの上空から来ては去りつつ爆弾の雨を降らせていた。

木屋瀬東に金剛山、その南に尺岳、雲取山、

福智山、北側に続く嶺々のはては帆柱山。

その山々の尾根に、探照燈の陣地や高射砲陣地があるらしく、照空燈のライトが美しく交差していた。その一つが敵機を捕らえると、すぐに他の光もそれに加はり、集中した光の焦点に銀色の敵機の姿があり、離さずに追跡していた。それは美しい眺めでもあつた。

ふと気がつくとき、それらの編隊から離れて、ただ一機だけ南方に飛ぶB29の姿があつた。

帆柱山から金剛山上空に向かふ途中で、鳥で言へば心臓のあたりにポツンと赤く光るのが見えた。火災をおこしているらしい。日本軍の砲火にやられた為編隊から離れたのだと思はれた。そのすぐ後ろから、日本軍飛行機からの曳光弾らしい赤い光が二度、三度、掃射するのが見えたが、いづれもB29の下方を平行に払うばかりであつた。

どうやら友軍の飛行機はB29の高度まで上昇するのが不可能のようであつた。そのうちに今度は斜め下方から上昇しつつ射撃したらしく、これは命中したように見えた。丁度金剛山上空あたりであつた。

今になつて思ふと、この敵機は既にこの時、操縦機能の一部に故障をきして、乗組員の意思通りには動かさない状態に陥つていたと思

はれる。もし自由に操れる状態だったならば、何もこちらに向かふ必要はなく、豊後水道を目指し、そのあたりの海に不時着水すれば、火災も消えて、全員救命出来たかもしれない。

このB29は、大きく右巻きの螺旋形を描いて飛びながら次第に高度が下がつたらしい。機内の火災は次第に大きくなり続けていた。

はじめのうち敵機は英彦山のあたりに墜落すると思つて見ていたところ、香春岳のあたりから、ぐるりと西に向きを変えた。真南に来た頃はさらに低くなり火災もひどくなつていた。博多辺りに落ちるのかなと思つていよううちに北に向きを変えた。木屋瀬辺りに落ちるかと思ふ間もなく、植木駅の向こう近くに来たと思はれるところ、東に向きを変え、こちらに向かつてまっすぐに飛んで来た。

敵機の色は火災の為オレンジ赤色に輝き、映面で見ると墜落機のような嫌な爆音を響かせながらまっすぐにこちらに向かつてくる。

高度はますます低くなり、見える大きさはぐんぐんと大きく、幅を拡げながら迫つて来た。

これを見ながら咄嗟に思った。ああ、木屋瀬が全滅する！積んである爆薬とガソリンの引火の為、吹き飛ばされて皆焼死死ぬ。俺も今夜が最後だ。

嗚呼！なぜ連れて来たんだらう。母親が待つているので早く帰りたいと言う後輩を強引に連れて来たばかりに、こんな事になるうとは！残された母親の嘆きは如何ばかりか！どれほど嘆いても泣き切れぬ思いだらう。

お母さん、ごめんなさい。・・・一瞬の間に駆け巡る千万無量の思いに胸は張り裂けそうで

あった・・・。
それなのに当の本人は向かってくる敵機の姿に見とれていた。

「おーお。美しいのうー大きゆうなったのう。」と山口弁で感嘆している。

B 29は大きく翼をひろげつつ、すぐそこまで迫っていた。

万が一助かるかもと咄嗟の間に思ひ、彼の頭をボカツと殴りながら叫んだ。

「はよ跳びこめー」
彼はすぐに壕に跳び込み、指で目と耳を押さえかがみこんだ。

間髪をいれず私も跳び込んだが、両耳に指を突っ込み目は開けたままだった。跳び込むと同時に目の前がパーッと明るくなった。耳から指を抜いてみると爆音が聞こえない。墜ちたんだ、俺達は助かったんだと思つた。とたんに後輩の背中をどやしつけて叫んだ。

「オイ墜ちたぞー出ようー」

二人とも壕を跳び出してすぐ裏木戸に走り、土手を駆け上がった。

すぐそこに赤い炎が燃えている。福田材木店、岩尾酒造、天理教のすぐ裏手の河原が燃えていると思ひながら。

上がってみて驚いた。すぐそこと思はれた炎は中之島のものであった。島全体が燃えていた。

当時、中島橋の少し上流寄り、こちらの土手で言うと庚申様の社よりまた上手、土手の道と町からの道の交わる所より少しまた上流の地点の向かい側のあたり。今でも良く白鷺が遊んでいる当たりから、細い流れが遠賀川から犬鳴川に向けて流れていて、中之島は完全に島になっ

ていた。

その小川のへりから下流の島の端まで、中之島はすべて火の海となっていた。

島の下流側の端、遠賀川に犬鳴川が合流する辺りに迄火炎が盛んに上がっていた。

中島橋のすぐ近くの下流側、橋スレスレの所にB 29が墜落したらしく、その辺りが特別もの凄いい勢いで空高く火炎を吹き上げていた。その炎が我が家から見えて丁度こちら側の河川敷の火災と錯覚するほど近くに見えたのである。

パンパンパンパンと弾ける音が続き、時々ドーンとなる音も交えて、燃え盛る様はもの凄く、とても人は生きてはおられず、乗組員は全滅しただろうと思はれた。

事実、生きて動く人の姿は見られなかった。

また誰でも近づくと人はあのパンパンと爆発する弾にやられて蜂の巣のようになるだろうと思はれた。

おそらく、搭載した数千発の機関銃、機関砲の弾丸が火炎の熱で爆発しているのだろうけれど、こちら側までは飛来してないらしいのが、不思議だった。

ふと気がつくとな何人もの人々が同じく土手に上がっていて、この盛んな火炎を眺めて言葉もない有様であった。

中之島全体の火は、飛び散った破片や石油に依るものらしかったが、大小様々な火炎をあげて島全体が真っ白く輝くように燃えていた。白い炎というのは千度に達する高熱だったろう。



墜落地の状況1.(筆者による)

燃えている炎の色は地面近くは、殆ど真っ白く輝くような光で、それより上、地上二メートル位より上の方は明るく輝く黄色、それより上に行くに連れてオレンジ色となり更に高くなると赤色の濃い炎となって燃えさかっていた。

その時、警防団の人が大声で警告を始めた。

「危ないから皆すぐ自宅に帰りなさい。」

「直ちに土手から降りよ。」

「すぐ避難せよ。」

と繰り返して叫んだ。

丁度その時、ザーザーと雨の降るような音が始めて、何か降って来た。掌に受けてみたが、乾いていて雨ではなかった。急ぎ自宅に帰り、座布団を取り出して庭に立ち、受けてみるに細かな砂粒であった。

墜落時の爆風で空高く吹き上げられた物が、今になって降って来たのである。

もし砂より大きい物が落下してくれば危険極まりない。警防団の警告はまさに時宜にかなったものだった。

翌日私は屋根に上がって検査した。

瓦の一枚が割れていて、爆弾の破片らしき鉄のかげらがそこに有った。

この破片はついぶん後まで大事に取っていたのだが、心ない家人が捨ててしまったらしい。

墜落したB29は、もしあのままの方向で墜ちたのであれば、木屋瀬は全滅するほどの火をかぶる筈であった。

突然ガクンと機首が下がり中之島に突っ込んだのは、機体の火のまわり方が原因でそのようになっただかと思われ、私をはじめ木屋瀬

の住人にとつてはまさに天佑神助に近い本當に有り難い結末であった。

墜落直前のB29の中には、おそらく生きた乗務員はなく殆ど全員焼死を遂げその屍体を乗せたまま、飛び続け墜落するに到ったと思はれる。

火のまわり方、その勢ひからみて私はそのように信じている。

その翌日になって、後輩が帰るのを見送りに行くため橋を渡った。昨夜の墜落時の屍体の一部はちぎれて橋の上に迄散乱したのを片付ける為下に落とした、との話も後で聞いたが、血の痕が残っている部分もあった。

橋の丁度中程度の所に、橋に近くすぐ下流側の草地に六、七人の屍体が散乱しているのが見えた。(橋の上流側にも屍体が有ったか否か、今では思ひ出せないが、おそらく無かつたと思ふ)

肉付きのよい立派な体格の男子がさまざまに姿勢で倒れていた。皆全裸に近く火傷の為か赤っぽい色と黒ずんだ部分とが見えた。

着衣が燃え出したので脱いだのか？死後着衣が燃え尽きたのか不明である。

女性の乗務員もあつたと言う人も居たが、私の見た限りでは、男性の屍体だけであつた。

彼らは墜落時の衝撃で機外に投げ出されたらしく、彼らよりかなり離れた植木側の橋に近い下流側にB29の機体が墜ちていた。墜落時の衝撃で深くえぐられた大きな長い窪みの中で、機体はまだ爛つていた。

この墜落機は右翼端が橋に極めて近く、機首は中之島橋の中央位の方角を見て墜ちたらしく、墜落の為出来た窪みは橋とある角度をなして出来ていた。

深くえぐられた痕は、ほぼ翼の落下場所と



墜落地の状況2. (筆者による)

一致し、進行方向側に土砂の盛り上がりがかなり高く認められ、窪みを一層深く見せていた。屍体が橋の中央近く迄飛散したのとも状況は一致している。

墜落翌日には夥しい人々が橋の上や向こうの土手から墜落現場を見物に訪れた。

また、犬鳴川の側からは徒渉しにくかったのか、こちら側から遠賀川を徒渉して中之島に渡り墜落機の破片や部品を拾って持ち帰る人が後を絶たなかった。

私の弟、珪二も丁度帰省して家に居たのでいろんなニュースを私に伝えてくれた。

彼は人づきあい良く、行動範囲も広がったので聞き込んでくる話も興味深かった。

植木小学校は橋の向こう側に在るが、小学校のすぐ北隣りの農家の小父さんはB29の様子を眺めているうちに、突然自分の上に覆ひかぶさる様に飛んで来た。しかも超低空である、全身熱くてたまらんですぐ近くにあった稲積の中に頭から飛び込んで全身を隠し熱さに耐えた、という話を聞いて来ていた。

又、感田の方では農民が見守る目の前にパラシュートで降下して来た米兵があり、竹槍を持った群衆がそれを捕らえて警察に引き渡したなどのニュースを私に話してくれた。

彼は又墜落現場迄行き、エンジンの部品と思はれる品物を拾って帰って来ていた。

私も現場迄行って見ておけば良かったものを、余程のものぐさだったのか？とうとう行かずじまひになったのは、今になってみると惜しい事であった。

やがて春休みも終わるので学校に戻る為植木駅に向かった。その時中島橋から下を見たが、屍体は既に片付けられていた。

墜落現場の深い窪みと盛り上がった土砂はまだそのままであったが、その時の機体の残骸はどうだったのか全く思ひだせない。

やがて昭和二〇年八月十五日。日本の敗戦の日であり、天皇の詔勅により戦争は終わった。

墜落現場跡の窪みと土砂の盛り上がりは、敗戦後も長らく残っていた。戦後しばらくは米軍に依る占領政策が続いたので、すぐに米軍当局が調査にすれば良かったのに。いつの間にか跡地は埋め立てたられ、ならされて何処がどうなっていたのかわからぬ状態にされてしまった。

米軍が墜落現場の調査に動き始めたのは、その後かなりの日時が経過してからであった。

もっと早くに調査すれば、もっとはつきりとうわかっただろうに。今頃ではもう遅いよ。と思つたのを思ひだす。

それでもかなりの事が判つたらしい。

B29の墜落は日本国中でも稀にしか無い事例だったに違いない。この近くの人々にとって大事件だっただろうけれど、私にとつても得難い経験であった。

しかも被弾まもなくのB29が、次第に火災が大きくなり墜落するに到る迄の一部始終をつぶさに観察出来たことは、偶然とはいえず、掛け替えの無い機会に恵まれたものであったと思ふ。こうして、この出来事を後の世の人達の為に

書き残す事が出来るのは、誠に望外の幸せである。私は今九十歳である。今迄長生き出来た事とあわせて神佛に深くお礼の祈りを捧げたい。ありがとうございます。

また、墜落した米兵にも、いとしい家族があっただろうに。戦争に駆り出されたばかりに、無残な戦死を遂げねばならなかった。まことに可哀想である……。

神はきつと彼らの魂をなぐさめて下さるだろうと思ふ。彼らの魂の為に平安を祈りたい。合掌。

すずみしゅいち

大正一〇年生。昭和二年九州帝国大学医学部卒業。医学博士。

木屋瀬で平成二二年まで数住内科医院院長。

■本稿は、直方郷土研究会会報『郷土直方』二十七号(二〇二二年)に掲載したものを、図版など一部修正追加したものである。

B 29 撃墜事件を思う

— 感田から見た墜落の一部始終 —

橘 邦巳

記憶を辿り書き留めてみる。何しろ五十七年も前の事だ。記憶も曖昧だ。間違いがあつたら指摘してほしい。尚文中での方位方角は、俺の実家から見ての事だ。了承願いたい。

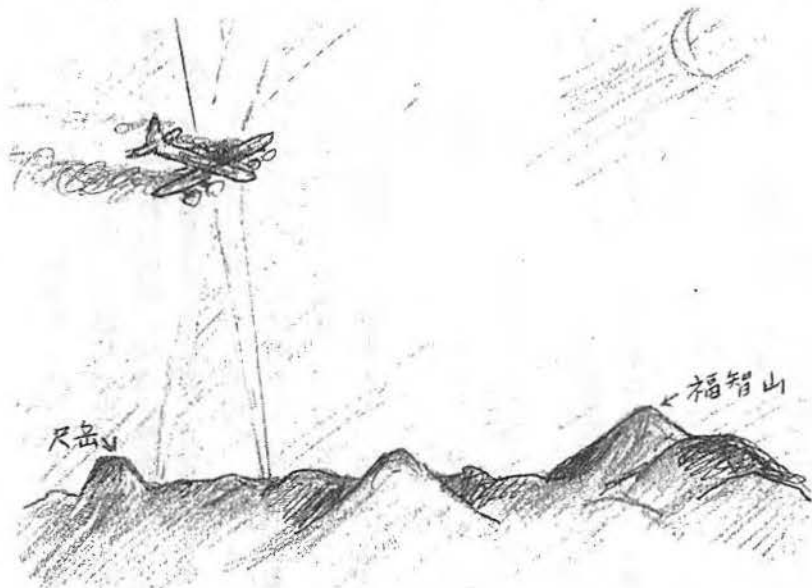
あれは太平洋戦争も終局に近い、昭和二十年の三月末だった。田圃の麦も大分大きくなり、空豆も花をつけはじめた。夜の八時頃だったと思う。突如空襲警報のサイレンが鳴り響いた。家の者は皆庭先に掘った防空壕に入った。俺も入ろうかと思つて家を出たが、ふと爆音らしい音が耳に入った。はて、敵機はもう近くに來ているんじゃないか。ここじや見えんな、屋根の上からなら見えるかな。よし、屋根に上がろう。

丁度良い所に梯子が立て掛けてあつて、それを登つて納屋の屋根に上がった。

空はうすぼんやりと星も無く、春霞の空だった。いたいた、敵機が見えた、一機だった。丁度帆柱山の上くらいを、不気味な爆音を響かせながら、南の福智山の方へ飛んでいた。サーチライトに捕らえられていて、鮮やかな銀色に輝く機体を夜空に浮かび上がらせていた。B 29 だった。(あとで知った)

尺岳の上空あたりだったか、後ろから猛烈に追いかけて來た小さい機影がぼんやりと見えた。

(一機だったと思う)そしてその機影から機銃であろう、曳光弾らしい光がB 29 目がけて飛んだ。火花が散るような速さだった。



絵・渡邊次郎

間もなく福智山上空あたりだったか、前を飛んでいるB 29 の、左側の一つのエンジンに命中したのか、黒煙と一緒にドツと火炎が噴き出した。そして間もなく今度は右側のエンジンから黒煙が出た。そして機体は大きく西へカーブして、直方の町の上空辺りでは、四つのエンジンの全てから黒煙と炎が噴き出していた。

機体は尚も大きく北方向にカーブして、どんどん高度が下がり始めた。

「ウワー、こりやー墜つるぞ。芦屋ぐらいか」

「イヤ、下手すると中間ぐらいに墜つるぞ」

その時には家の者は皆防空壕から這い出していった。

近所の人も皆集まつて、みんな機の行方を目を皿の様にして見ていた。機は知古(直方市街地北部)の上空辺りから殆ど垂直に近い状態で、機首を下に向けて降下しだした。

「キヤー、植木に墜つるわー」

と、誰かが叫んだと同時に、植木の駅の方角に激しい火柱が上がった。物凄い音がした。家が揺れた。そして夕立みたいにザーと砂粒が降ってきた。落下点から直線距離にして二千メートルは離れている我が家だ。凡そ事の凄さが想像出來よう。

(尚、木屋瀬の知人の話によると、航空燃料が遠賀川に流れ出し、それに火がついて垣生(中間市)の辺りまで火の川になつたそうだ)

然し、その夜の出来事は、それだけでは済まなかつた。

ウワー、ヤッター、それ行けー、とばかり、家を飛び出し表の道まで出た。ところが、闇の向こ

うから大きな声でした。

「オーイ、おーごとじやー。落下傘が降れた。落下傘部隊墜ちよるぞー」

コリヤー又大変じゃー、墜落現場どころじゃな
いぞ、こつちの方が面白そうだ。(落下傘部隊はな
いだろう、どうせ墜落されたB29の乗員、たろうか
ら、多くても二、三人だろう)と、不思議と恐怖
心は無かつた。好奇心の方が強かつた。

「おいちやん何処ナー」

「あつちの方ちよるぞー」

面白いもんで闇夜で見えもしないのに、おいち
やんが指差している。たろう方向が判るんだナー。
走つた。麦畑の中を、畦道を。漸く着いた時に

はもう既に二十人程の人ばかりがしていた。まだ
駆けて来る人も居た。中央に大きな男がホールド
アップして立っていた。一人だつた。抵抗の気配
は全く無かつた。周囲の人より肩から上くらい出
ていた。

足許に落下傘であらう白い布が広がつて不気味
だつた。警官らしい人が体を検めていた。程なく
縄をうつつ気配がした。そして何処かへ連れて行つ
た。五、六人の人が後をついて行つた。

これで一件落着、緊張が解けたのか、あつちこ
つちで笑い声がしていた。

「お前その罅で、何するつもりやつたんか」

「ハッハッハ、いやーほんとじや。じやがお前
もオーコー(担い棒)どま持つち来ち何する気か
よ。あんまり人の事一言われんぞ」

「ハッハッ、いやーほんと」と

みんなオットリ刀ならぬオットリ何とかで、鎌
あり鋏あり唐鋏ありで、中には縄まであつた。し
かし妙なもので、何故か竹槍は見なかつた。

(注) 場所は現在の筑豊電鉄・遠賀野駅あたり
だつたと思う。稍西寄りだつたか。

事が一段落し、あつちこつちでまだ談笑が続
いていたが、もう大人の話に興味はない。心ははや
墜落現場だ。夜の田圃の畦道を懸命に走つた。

漸く着いて場所はと見れば、遠賀川のド真ん中
で、丁度中島橋(旧)の下流約三、四十メートル
ぐらいの所だつた。火は消えていた。中島橋は消
防団が出てロープを張り、通行止めになつてた。
堤防は怖い物見たさの見物人で、黒山の人だかり
だつた。

堤防をあつちこつちと場所を変えてみたが、よ
く見えなかつた。横に居た老人が呟く様に言つて
いた。

「良い所に墜てちくれた。橋を直撃しても大変だし、
植木の町に墜ちても木屋瀬に墜ちても、大惨事に
なるところじやつた」

とにかく此処に居ても良く見えんし、又明日出
直して来る事にして、取り敢えず帰つて寝る事に
した。家に帰つて寝る時には、もう東の空は白み
かけていた。何とも忙しい夜だつた。

* * * * *

昨夜の疲れか、翌朝起きたのはもう昼近かつた。
飯もそこそこに墜落現場に行つたら、もう中島
橋の通行止めは解かれていて、橋の上は格好の見
物席となり、大勢の人が来ていた。現場周辺は消
防団が警戒に当たつていた。

機体は尾翼を残して、あとは地中にめり込んで
居た様で、よく見えなかつた。遺体はまだ手付か
ずだつたと思う(例えば一カ所に集めるとか)。あ

つちこつちバラバラになつていて、菰が被せてあ
つたと記憶している。

警戒に当たつていたある一人の消防団員が、被
せてあつた菰をめくつて、突如頓狂な声をあげた。
「アリヤー、こりやあ女じゃが。女も乗つて居
たんかー」と。

後日終戦になり、進駐軍の命により、機体の撤
去と乗員(遺体を含めて)の確認の為、現場を掘り
起こしたところ、機体は十数メートルもめりこん
でいたと云う話だつた。真偽のほどは判らないが、
泥炭の積層した軟弱な川底だ。本当だろう。

以上、空中戦から墜落までの経過は、筑豊一円
の当時の人の、殆どの人が見聞した事であつてか、
今でも時々話題に上り、そして語り継がれてゆく
のは当然の事と思う。

それは結構な事だが、何故か落下傘の事に就い
ては誰も語らない。何故だろうと考えてみる。そ
れは一村落の小さな、しかも夜の出来事だ。米兵
の抵抗もあり、死傷者でも出たなら話は別だが、
事はスムーズに済み、話題にもならなかつたのが
主因だろう

又、一説に依ると、これは戦後に聞いた話だが、
捕虜の取り扱い問題など、いろいろあつたのか、
この件に就いては、内密にする様にとの、軍部か
らの圧力があつたとも聞いた事がある。

いづれにしても些細な事件であつたらうが、誰
も語らず誰も関心も持たず、このま忘れ去られる
事は残念でならない。

* * * * *

戦争末期の出来事に、も一つ忘れてはならない

事がある。それは撃墜事件の前だったか後だったか、はつきり記憶していないが、我が村落の田圃の中に、海軍航空隊の飛行場が出来た事だ。

飛行場と云つても滑走路が一本出来ただけだが、場所は遠賀川の堤防から東へ四、五十メートルくらい離れて、堤防に沿う様に、凡そ千メートルかそこらの短い物だったが、今の様に機械化されていない時代だ。モッコ等を担いでの作業は大変だったそうだ。勿論村人達も使役に駆り出されての話だ。

実家の下の田圃にも、高さ五、六メートルくらいの蒲鉾型をした格納庫が出来た。然し、いずれも、滑走路から発着する飛行機を見た事もないし、又、格納庫に出入りする飛行機も見ないまま終戦になった。

撃墜事件から約四ヶ月後の八月八日に八幡大空襲があり、余塵も収まらぬ一週間後には、日本の無条件降伏で、呆気なく戦いは終わった。

* * * * *

これは余談になるが、戦後、滑走路も格納庫も村人に払い下げになったが、もとの田畑に戻すのに大変な労力を強いられたものだ。俺も格納庫の解体に親父の代わりとして使役に出たが、

「お前は若いから屋根に上がれ」

と言われ、OKとばかり屋根に上がったが、作業方法の手違いで、屋根と一緒に落下して、足を骨折すると云う痛い目にあつた。今でもサイズの合わない靴を履くと痛む。

とにかく小さな田舎町、小さな村落が、出征兵士の戦死の計報を聞くことを除いて、これ程戦争と云うものを、実感として体験させられた事は未曾有であつたらう。

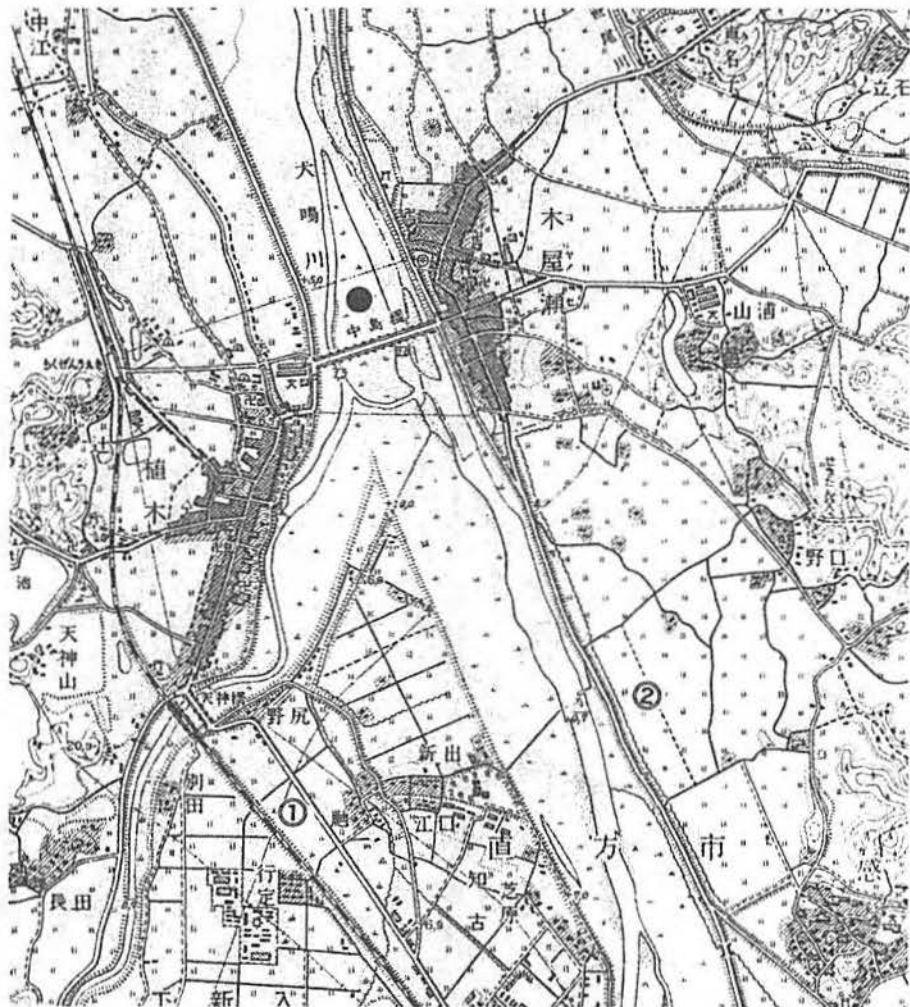
然し、残念ながらそれを語る人も、今では居なくなつた。よし、じゃあ俺が…、と思つて話しても、聞いて呉れる者も居ない。もう既に過去の事なのか。

悔しい限りだ。
たかだか五十七年前の事を…、されどやはり五十七年か…。歳月の重みは否めない様だ。せめてもの想いに、ナツメロでも歌い、軍歌でも怒鳴つて憂さを晴らすか。 (平成十四年四月 記)

● たちばなくにみ

昭和四年生まれ。B29墜落
当時、直方市感田高柳在住。
現在木屋瀬在住。

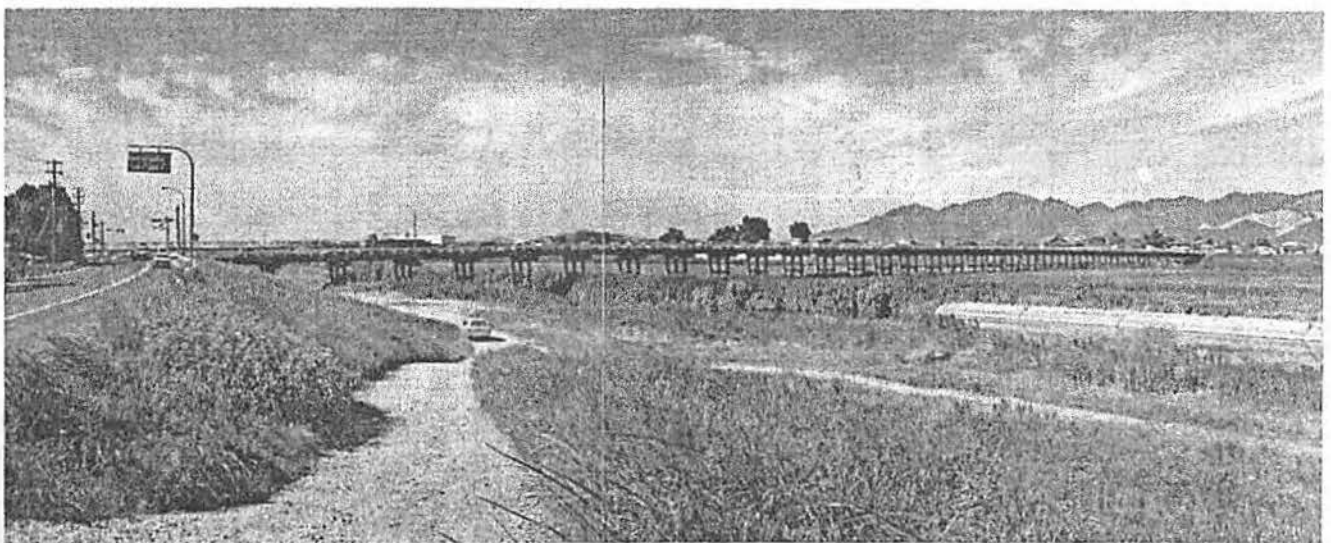
(本編は、渡邊次郎編『巳巳の会長寿記念文集』
平成十六年より転載した。さし絵も渡辺氏に
よる)



1.ハンレイ少尉降下地点 2.アンドリュース少尉降下地点 ●.B29墜落地点
 (昭和30年測 国土地理院地図による)



B29墜落現場付近



旧中島橋 昭和59年ころ 上流より見る

随想

木屋瀬校区社会福祉協議会 会計

石橋 信也

世の中は激変したが、その間大きな災害に出会った事はない。木屋瀬町誌を見ると、昭和十年頃までは、度々水害に見舞われ、火災では本町、中町を中心に百二十四戸が全焼した明治四十年の大

昨年「古希の祝い」をした。「古来稀なり」と言われた古希も、今では近くに元気な同級生がごろごろいる。

しかし、私が出会った一大事は、昭和二十年の終戦直前、遠賀川の中洲に落ちたアメリカの大型爆撃機、B29であろう。当時私は小学校五年生であった。真珠湾攻撃で始まった太平洋戦争

いて、授業中に警戒警報が出ると、担当している近所の下級生二人を迎えにいった、家まで送り届けるのが上級生の役目であった。昭和二十年初夏の夜中、空襲警報で起こされ、裏の防空壕に移っ



も四年目で、南方の米軍基地から、日本空爆に飛んで来るB29が学校の上空を通過して行くのが、日常の出来事であった。小学校の運動場は芋畑になって

た。夜の空襲は大変なものしい。各地の陣地から敵機を捜す照空灯の光が空いっぱいに見られる。私は壕に入らずこの光のものものしさに見とれていた。

一本の光線が敵機を捕らえた。他の光線もそれに合わせ、光の交叉した所を敵機が飛んでいる。「ズドーン」高射砲の音が聞える。その時、敵機からバツと炎が出た「当たったな」と感じたが、機はそのまま屋根の影に隠れた。それから二十分くらい後の事、「オー」と物凄い音と共に家の屋根すれすれに巨大な火の玉が走った。みんな悲鳴を上げた。「ドーン」大きな地震きと共にバ

ラバラと砂が降ってきた。急いで土手に走った。B29の墜落である。あれから59年、夏になると「八幡空襲」の日を思い出す。小生も小学校三年生、幼いながらこの時の情景はしっかりと脳裏に刻まれている。中島橋川下の遠賀川と大鳴川の合流地点は、いまも中島が三角型となっている。確かその付近に川下に向かって機首を突っ込んだようだった。そこから中島いっばいに直方市知古の所まで機体の残骸が散らばっていたように思う。その時の衝撃は墜落現場に程近いとはいえず、わが家の防空壕がひび割れして、水溜まりとなってしまう程である。機体は、長い間燃えくすぶり、その間、食事も喉を通らないほどの化学的な異臭に悩まされた。中島橋の真下には搭乗員の胴体だけの遺体が転がっていた。哀れであった。

あれからおよそ六十年。この随想を読みながら、わが国のごしえの平和を願ってやまない。平和こそ真の福祉社会づくりの大前提であると思いつつ……。 (梅本)

編集 余 尚

B29 墜落炎上セリ

昭和20年3月 B29植木墜落資料集
2013

**この事件についての情報を集めています。目撃談や
ご存知のことがありましたら、下記へご連絡下さい**

822-0015 直方市新町3-2-32 牛嶋 英俊
(電話・FAX 0949-22-1409)